

シェイクスピアの歴史劇に関する一考察

—「ヘンリー五世」における対立的視点について—

伊藤 淳子

シェイクスピア作品における登場人物に関して、批評家の評価が大きく二分する例は珍しくないが、シェイクスピアの最後の歴史劇である「ヘンリー五世」の主人公ヘンリー五世も、そうした批評家の意見の対立にさらされて来た人物の一人であると言うことができる。J・ドローヴァー・ウィルソンをはじめ、J・メイス・フィールド、J・H・ウォルターといった批評家らが、ヘンリー五世の英雄的資質と成功を称え、「理想的君主」としてのヘンリー五世像を綿々と跡付けてきたのに対し、E・M・ティリアード、H・C・ゴダードらは、ヘンリー五世の宗教的偽善や、彼の台詞と行動に見られる矛盾を暴き出すことによって、痛烈なヘンリー五世批判を行って来た。つまり、一方がヘンリー五世を敬虔なキリスト教徒、あるいは国民的英雄であると称賛すれば、もう一方が同じ人物を奸智にたけたマキャヴェリストとして弾劾すると言うように、批評家らは絶えずヘンリー五世の毀誉褒貶を繰り返している。両者のあわいは一向に解消する兆しを見えていないのである。

しかしながら、このように両陣営の批評家から提示されるヘンリー五世像が苛烈なまでの対立を見せるということは、見方をかえれば、「ヘンリー五世」という作品自体が、対立する要素を内包し、視点によって様相を変えさせる騙し絵のように、玉虫色の性格を持っていることの証左であると考えられるのではないだろうか。

うか。礼賛と批判という、相反する視点の対立や、そこから生み出される多義性こそが、「ヘンリー五世」の特徴であり、こうした作品に、肯定にせよ否定にせよ、無理矢理一つの定義を当てはめてしまおうというのは、片手落ちの解釈であるばかりでなく、作品の大切な側面を見落すことになると考えられる。確かに、圧倒的優勢を誇っていたフランス軍を打ち破り、イギリスに勝利をもたらすというヘンリーの行動は、それだけでも文字通りの「来た、見た、勝った」式の武勇伝ではあるが、シェイクスピアは、そうした英雄像を描く傍ら、常に批判的視点を劇中に忍ばせている。シェイクスピアの描くヘンリー五世は、極めて両義的な存在なのである。

そうした両義性は、まず作品の構造そのものに見出すことができる。「ヘンリー五世」は、コーラスが各幕に先立って、国王の美德を称え、勝利をことごとく台詞を述べるという際立った特徴をもっているが、問題は、このコーラス役の台詞の内容が、それに続く劇のアクションとの間に齟齬をきたしているという事実である。その一例として、最も大きな食い違いを見せる四幕のコーラスとアクションの内容を具体的に検討してみたい。

四幕において、コーラスと劇のアクションは共に、アジンコートの決戦前夜にヘンリー王が、疲れ切ったイギリス軍の兵士たちを見舞う姿を描いている。しかしながら、前者においてその出来事は、「それまで色蒼ざめ意気消沈していた兵たちも、／＼国王の元気なお姿を見て勇気をふるい起こします」（四一一二行。訳文は小田島雄志訳を引用した。）というように、王と平民の理想的な調和として描写されているのに対し、実際の四幕のアクションにおいて我々が目にするのは、ピストルにののしられ、ひいてはウ

イリアムズという一兵卒と大喧嘩の末、決闘の約束までしてしまふ、コーラスの内容とは対照的なヘンリー王の姿である。コーラスにおいて礼賛された君主の姿は、アクションにおいて徹底的に相対化されているのだ。

この対比において、注意したいのは、劇のアクションの中で兵士を見舞うヘンリーは、コーラスでの描写と違い、終始変装をまといっているという点である。変装というのは、エリザベス朝演劇では極めて多用された約束事であるが、君主が変装をする場合、それは別人になりすますという本来の機能よりも、国王という「役割」を有する特殊な存在から「個人」という肉体のみの存在に還元されるという意味合いを持つことになる。つまり、変装をまといて自らの軍を見舞うヘンリーは、国王という「役割」を一時的に棚上げしたヘンリー個人であり、コーラスにおける「役割」と「個人」を兼ね備えた、名実とも国王ヘンリーとは大きく隔たっているのである。言い換えるならば、コーラスとアクションのヘンリーの有様の対比は、国王の「役割」と「個人」の相克であり、この対比を通して国王の本質は「役割」にあるのか、「個人」にあるのかという、「リチャード二世」以来の問題が追究されているのである。

「ヘンリー五世」における礼賛と批判という対立する要素の共存は、こうしたコーラスとアクションの対比というような構造的なものだけでなく、人物の対比、場面の配列などにも見られ、作品中に遍在している。紙幅の都合上、すべての例を挙げることはできないが、「ヘンリー五世」における礼賛と批判の共存という特徴の極めつけのものについて考えてみたい。

この作品のエピローグにおいて、コーラス役は、ヘンリー五世

の勝利によって勝取られたフランスが、後のヘンリー六世の治世では失われ、更にはイギリス国内までもが、薔薇戦争という惨事に見舞われることを述べる。このコーラスの台詞が最後に我々に提示する歴史的パースペクティヴから眺めると、劇中華やかに描かれていたヘンリーの勝利は、幾分矮小化されることになる。ヘンリーの武勇は、そのまま騒乱の序曲となっているのである。つまり、「ヘンリー五世」における礼賛と批判の対立は、このエピローグに収斂するのである。